

随想

六〇年前の回想

緩やかに、時に激しく変遷する時代をいかに渡るか

（株）PPQC研究所 加藤 宏光

先日小学校の同窓会へ出かけた。思えば卒業から六〇年にもなる。この同窓会に参加するのは二度目、一度目は二〇〇五年、茨城でLPAI汚染が明らかとされ、六〇〇万羽にも及ぶ採卵鶏が淘汰されたあの年である。

それまでは、著者は、小、中学校および高校のそれぞれ同窓会で《行き先知れず》とされていたため、案内が届くことはなかった。たまたま、姉が高校の同窓生でもつ合唱クラブで活動していたため著者との同窓生（女性）と知り合い、そこで小学校同窓会へ連絡してくれた。そこから連鎖的に中学、高校の同窓会へと繋がった次第である。それから一〇年余り。久しぶりで顔を合わすメンバーは、昔

の面影を残す人、だれかわからないまま会話を進め、改めて自己紹介でやっと思い出す人などさまざまであった。六〇年余りの歴史を重ねて、それぞれが歩んだ日々が味となって顔に刻まれている。それぞれなりにその味が似合っていることに改めて感じ入った。優等生であった友が優等生そのままでエリートとしてサラリーマン生活を終え、

ただの爺さんとなっていたり、劣等生であった人が今の人生を謳歌していたり、あるいは《ダレ》《いた輩》がその時代のグレ仲間思い出について赤心をもって吐露したり、それぞれ楽しい語らいで、長い時の流れを実感させていた。

『週刊新潮』という一般週刊

誌（株式会社新潮社発行）がある。先月（二月二十二日号）、六〇年前の創刊号を復刻した。著者が一二歳、小学校を卒業した年のものである。何があったのかを思い出してみる。

まず広告。マツダラジオが一万九、九〇〇円、小西六のカメラ（コニカⅡB）が三万一、五〇〇円。一九五〇年代後半で三種の神器と呼ばれた《洗濯機》《電気冷蔵庫》《テレビ》がある（ちなみに白黒テレビで六万二、五〇〇円）。また現在の全日空（ANA）は日本ヘリコプター輸送株式会社として一ページのカラー広告を、ヤマハ（バイクやピアノあるいはスポーツ用品で知られる）は創業者・山葉寅楠氏にちなむ山葉ピアノとして

広告を出していた。巻頭に上げられたグラビア写真の人々は《原節子》《石原裕次郎》《谷崎潤一郎》《山田五十鈴》《山口淑子》《五藤昇》《浅沼稻次郎》とすべて鬼籍に入っている。

目次から目を引く記事を挙げると、三億円事件敗退記、吉田茂回顧録・領土問題について、テルアビブまでの道、スカルノ第三夫人の自殺未遂などなど…。この中で、現在もタレント活動をしている方を取り上げた最後の記事をちょっと見てみよう。まず、記事の解説として「グヴィ夫人の生い立ちと第三夫人となるまでのいきさつが記述してある。彼女は貧しい家庭に育ち中学卒業後、赤坂の高級クラブ『コパカバーナ』で働き始

めた。一九五九年（二十九歳の時）インドネシア大統領・スカルノを紹介され、六二年に結婚、第三夫人となった。

自殺未遂・旧姓、根本七保子さん（二四歳・当時）がその宿泊先、帝国ホテルで睡眠薬自殺を図ったのは十一月四日。スカルノ大統領夫人であるためか、マレーシア放送が一部を報道したのみであった、という。ことの顛末は、スカルノ元大統領の女性問題と大統領夫人としての軋轢に悩んだ結果で、日本文化とインドネシアのその乖離が主因と考えられる。記事の扱いはあくまで興味本位で、その後のデヴィ夫人のファーストレディとしての活躍やスカルノ大統領の失脚（一九六五年九月三十日）、死亡でフランスへ亡命、その後ニューヨーク生活を経て帰国し、タレント活動（二〇〇〇年頃）をしている経過が紹介されている。事件としては大きな起伏があるものではないが、かのデヴィ夫人の経歴が今さらのように追えることが興味を引

いた。

時事問題として現在と対比できるのは《吉田茂回顧録・領土問題について》であろうか。

吉田茂元首相が回顧録として記述したこの記事にはサンフランシスコ講和条約に際して、領土問題に苦慮していたことが明かされている。サンフランシスコ講和条約締結に際する彼の演説には細心の配慮がなされ、《いわゆる北方領土が本質的には日本に帰属することを内に含めながら、いかに連合国側の要望に沿っていくか》という難問に適應する表現がとられている。たとえば、千島並びに南樺太を『ソ連に返還もしくは譲渡する』という表現を避けて、連合軍に向けて『（権利を…著者註）放棄する』という文字を採用した。通常われわれが使う言葉（書き言葉を含む）には、それほどの留意をしていない。しかし、言葉の解釈で行動が制限される重要な書類や講演では、その表現に将来を縛られる可能性を含む。とくに、戦後のような弱者

の立場で強者に対して将来の展開をより良くするためにどのような表現をすべきかを、かつての国の指導者たちは十分に理解し配慮していたことに改めて感心させられる。

六〇年とひと口にいうが、明治は四五年間、大正が一四年で合わせても六〇年に届かない。明治維新以来のこの期間に日本は日清、日露戦争を経ている。国の命運を左右するほどの大きな戦争を二度もするほどの期間が六〇年である。現在は平成十八年。昭和と合わせて、それ以降九一年にも及ぶ。一年ごとと同じように繰り返される年数を自覚しないままに六〇年を経て、かつての小学生在が古希を超えるまでになつていく。マツダ・キャロルという四気筒の軽自動車が発売された昭和三十六年頃に外国鶏が導入されて、採卵養鶏が急激な産業化への道を歩み始めた。ブロイラーと称される肉養鶏が産業として飼育されるようになったのは、昭和四十年前後（最初は大阪の食堂・

くだおれの創業者山田六郎によつて戦後輸入されたというウィキペディア）。それまで、関西では「かしわ」と称された鶏肉（もつぱら成鶏・糜鶏肉）がブロイラー肉に急速に置き換えられた。

古き良き時代には一、五〇〇〜二、〇〇〇羽の採卵養鶏で十分に家族が養え、二、〇〇〇〜三、〇〇〇羽のブロイラー飼育でもリッチな生活が謳歌できた。時は下つて現代、直販を望めないローカルエリアで、かつて大く中規模であった一万羽クラス採卵養鶏を経営するケースでは、その存続すら危うくなつてきている。ブロイラー産業では、処理基準の厳格さから弱小が生き残ることがほとんど不可能となつていく。

時の流れが緩やかに進むため、自覚のないままに時代に翻弄されるのは、養鶏産業に限ったことではない。これからも緩やかに、時に激しく変遷する時代をいかに渡るか、神経をとがらせる必要がある。